



本県の河川の多くは、降った雨が一気に海まで流れ出るなどの特徴があり、これまでたびたび洪水被害に見舞われてきました。

このため、県内河川の整備計画策定においては、

- ① 氾濫が想定される区域内の被害の大きさを考慮し、想定する雨量を決め、
- ② 流域の状況に合わせて河川改修やダム建設の最適な組合せを決定し、施設整備を進めています。

ここでは、過去に大きな被害のあった時津川と川棚川の取組を紹介します。

時津川河川改修事業

(時津町:時津川水系)

時津町市街地を流れる時津川は、川幅が狭いうえに、川沿いに学校や病院などの公共機関や商業施設が集中しており、昭和57年の集中豪雨では650戸が浸水被害を受けました。

この災害を契機として、将来の洪水に備えるため、昭和63年に下流側から河川改修を始め、今年3月には河口から約500mほどの国道206号古川橋までの拡幅が完了し、引き続き、上流側の拡幅工事を進めていきます。



大きな被害を受けた上流の長坂橋周辺(昭和57年7月)
※今年度着工予定



川幅を拡げるための護岸改修と古川橋の架け替えが完了(平成28年3月)

石木ダム建設事業

(川棚町:川棚川水系)

川棚川では、川の拡幅を進めていた平成2年においても、集中豪雨により384戸の浸水被害が発生しており、河川改修と野々川ダム(昭和47年度完成)に加え、石木ダムの建設によって将来の洪水に備えることとしています。

なお、石木ダムは、水源不足に悩まされている佐世保市に安定した水道用水を供給することも目的としています。



川棚駅前交差点の浸水状況(平成2年7月)



石木ダムの完成予想図

水害に強い県土づくり 事前防災・減災対策



災害を防ぎ、災害に備える

地震や大雨、台風などによる自然災害は、突然、思いがけないところで発生します。自分や家族を守る「自助」、地域で助け合う「共助」、行政による「公助」など、災害に備えるために、それぞれが役割を分担する必要があります。



がけ崩れの被害を受けた人家



整備前



整備後

斜面を保護する法面工で、がけ崩れを防ぐ

安全・安心な暮らしを守るために

梅雨期や夏期は、梅雨前線豪雨や台風に伴う水害・土砂災害が発生しやすく、県内でも過去に、諫早水害や長崎大水害などの大規模災害により、甚大な被害が発生しました。

また、4月に発生した「平成28年熊本地震」では、熊本、大分両県を中心に多数の死者・負傷者を出すとともに、家屋倒壊や土砂災害が相次ぎ、本県内でも、多い時には1,700人余りの人々が自主避難をしました。

こうした災害が発生した時に、県民の命と財産を守るため、災害に強い社会基盤の整備を進めるとともに、地域防災力の充実強化を図るなど、県では、「安心快適な暮らし広がる長崎県」づくりを進めています。

長崎県で起きやすい災害

本県には土砂災害危険箇所が16,231カ所あり、これは全国9位の多さです。

また、「山地が多く平地が少ない地形」「河川の傾斜が急で距離が短い」などの要因により、土石流や地すべり、がけ崩れ、洪水、濁水が発生する危険性が高い傾向にあります。

これらのことから県は、土砂災害を防ぐ施設整備や河川改修、ダム建設などを進めることにより、被害の防止、軽減を図っています。